

【自由 報告】

第1セッション：地域資源と地域社会

地域の資源利用にみる労働力の再生産 ～集落における農地利用にみる「自給」の評価～

東京農業大学大学院 濱田健司

1. 問題意識

資本の最大利潤の追求は生産力を向上させ利便性の向上させたが、資本・土地・労働力といった資源の再生産を破壊し、労働力の再生産システムを破壊してきている。それは効率的生産のための農工業・農林水産業の分離、生産と生活の分離、モノとカネの乖離などより資源循環の切断・破壊し、労働力の再生産システムを破壊・歪曲してきた。そうした中で資源循環をどのように維持または再構築し労働力を再生産していくかが課題となる。

2. 視点及び方法

モノとカネが乖離し、生産と生活が分離し、自給が崩壊していく「地域」内においてどのように資源循環が行われ、労働力が再生産されているのか、本報告ではそうした「地域」の様々な資源の一つである農地がどのように利用されているのかということについて、集落を地域の基本単位として考察する。

3. 結果

商品としての農業生産を行っている家でも、多くは採算ぎりぎりのところであるが、それでも農業生産を行っている。また高齢者の一人暮らしでも、単なる居住者でも自給畑を持っている。高齢者または一人暮らしでも農地を所有している場合は、商品農業生産ができなくても採算が合わなくても生活できる限り、可能か限り自分で農地を利用し、自分で利用できなくなっても農地を手放すことはない。

集落内での貸借の理由は高齢化と後継者不足、集落外への貸借理由は高齢化と労働力不足である。集落外へ農地を販売した理由は労働力不足と経営難、集落内への農地の販売は様々。借りてもらうなら顔見知り、売れるなら集落に限らないが誰でも売るわけではなく集落内より親類がそして集落外となる。また集落で家とその敷地のみを所有し農業以外の他産業に従事する賃労働者の家でも、農家同様に庭の畑で野菜を自給している。

4. 考察

採算が合わなくても生活していくことができる限り自給できるところまで、農地は自分で管理し、それができなくなっても私的所有していく。つまり、自給生産によってそこで農地が管理されている。採算が合えば生計を補填し、合わなくても自給生産によって労働力の再生産を行っている。今後も農地を管理できる個別農家は1) 比較的大きな経営耕地面積を持っている、2) 町内に安定した兼業収入先を持っている、3) 家族が集落内にとどまっている農家であり、その他は縮小しながら維持するが、いずれも自給が行われる限り農地を管理していく。さらにそうした中で法人と「集落営農」による農地の管理を行う可能性が出てきている。

5. 今後の課題

縮小していく土地をどのように管理していくか、また転作地はほとんど牧草地で、3割が転作されるとそこは耕作放棄地となるため、どのようにそうした土地を管理していくか、そして農地の利用によってどのように地域において労働力を再生産するかが課題となる。